

DALS ニュースレター No. 3



東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2003年9月1日

目次

講演や研究会について
島菌進

シンポジウム「死生観と心理学」
横澤一彦

ワークショップ「生命科学とスピリチュアリティ 生命倫理への新しいアプローチ」
島菌進

テキストのなかの死と生
佐藤健二

研究会案内・報告

Hugh Mellor 教授講演研究会「意思決定理論は何を語るのか」
一ノ瀬正樹

鈴木岩弓教授講演研究会「『あの世』からの眼差し 遺影を飾る死生観」
鈴木岩弓・島菌進

Animacy 研究会趣意書と研究会報告
林 徹

Levine 教授講演研究会の報告
市川裕

ワークショップ「仏教と死生観」の報告
末木文美士

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

講演や研究会について

島 園 進

前号では比較的規模の大きな研究会議について述べたが、この号では、より小さな規模の研究会についての紹介が多くなっている。

(1) ある分野で実績のある講師を招いて行うのが「講演研究会」だ。単に「講演会」といってもよいが、小さな規模で講師の話の後に議論をシェアすることを重視したいという意図をこめてこうよんでいる。

平成 15 年度は、ボストン大学から招聘して講義をしていただいた近世ユダヤ教研究を専攻するヒレル・レヴィン教授(6月)、生命倫理に関わりが深い意思決定理論で著名なケンブリッジ大学哲学科のヒュー・メラー教授(10月)、現代人の死生観の変容をフィールドワークを通して研究している東北大学の宗教学者、鈴木岩弓教授の講演研究会が行われる。

(2) 特任研究員や特任アシスタントなど若手の研究者や大学院生を中心に、現代取り組んでいる研究課題について報告し、討論しあう「死生学研究会」は平成 14 年秋から 15 年夏までに 4 度開かれている。これまで論じられたテーマは、「死生学研究の意義—パイオエシックスとの比較から—」「人間観の形成に関する比較文化的研究」「インド後期密教における死」「タイの精霊信仰における加害者意識と死」「ポストゲノム時代における生命の認識」などである。また、より限定されたテーマの研究会として言語学を中心とした animacy 研究会がある。

(3) 本 COE によって始められたものではなく、予算的にも別立てであるが、たいへん関連が深いのは、多分野交流演習「人間の尊厳、生命の倫理を問う」である。これは竹内整一教授を主査とし、島園も加わって平成 13 年度から始められたもので、講師をよんで年に 10 回ほどの講演と討議を行う。平成 14 年度からは応用倫理プログラムの一環にも組み込まれ、COE「死生学の構築」が始まると、それとも密接な連携関係をもつようになった。学部・研究科、教員・学生・市民の枠を超えて、多様な参加者が集っている。なお、詳細は次号で紹介するし、『多分野交流演習ニュースレター』でも紹介されているので、参照していただきたい。

以上、3 種に分けて述べてきたが、この種の小規模だが、つっこんだ討議ができる講演・研究会は目立ちにくいものではあるが、本研究プロジェクトの実質的な研究の前進という点からはたいへん意義の大きなものだと考えており、今後もぜひとも充実していきたいものである。

シンポジウム「死生観と心理学」

横澤 一彦

公開シンポジウム「死生観と心理学」は、日本心理学会第67回大会と共催で、4人の話題提供者にお話頂きます。島蘭進先生には、死生学COEの拠点リーダーとして、COEの進捗状況について説明頂いた上に、死生観への関心が興隆しつつある現状と臨床心理学や心理療法の流行との関係などについて論じて頂くこととなります。金児暁嗣先生には、死生観の規定因と死の怖れに関して論じて頂きます。とくに日本人の固有観念（オカゲとタタリ）と死の怖れとの関係に触れながら議論して頂きます。杉下守弘先生には、神経心理学の立場から、死生観の形成要因に迫って頂きます。脳の電気刺激による臨死体験や、磁気刺激による「神の存在体験」などのデータを検討し論ずると共に、心身二元論に言及して頂くこととなります。辻敬一郎先生には、生物とのかかわりの実体験や代理体験が、生活史を通じて生命の概念化や生命観の形成にどのように影響するかを検討して頂きます。

辻先生と杉下先生は主に実験的な方法、金児先生は統計調査的な方法、島蘭先生は心理学を横から眺めるような文化研究的な方法によるご研究に関して話題提供していただけると幸いです。「死生観」と「心理学」のそれぞれを研究する方法の多様性と、その接点について考えたいと思います。死生観に関する様々な心理学的なアプローチの違いの意味を考えることが、重要なテーマになるでしょう。本シンポジウムが、そうした出会いの場を提供できればよいと思っています。尚、日本心理学会会員以外の方も自由に参加頂けます。



日時 9月14日(日) 10時から12時まで
会場 東京大学 経済学研究科棟 第1教室(地階)
主催 日本心理学会第67回大会実行委員会
東京大学 21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる<死生学>の構築」
後援 東京大学
話題提供 島蘭 進 (東京大学/宗教学)
金児 暁嗣 (大阪市立大学/社会心理学)
杉下 守弘 (東京福祉大学/神経心理学)
辻 敬一郎 (中京大学/実験心理学)
司会 横澤 一彦 (東京大学/認知心理学)

ワークショップ「生命科学とスピリチュアリティ 生命倫理への新しいアプローチ」

島 園 進

生命科学が急速に発展し、医療や食生活を初めとして、日常生活のすみずみに先端的な科学やテクノロジーの影響が及ぶようになってきている。ここでは医学を中心に考えていきたいが、20世紀の最後の数年の間にクローン羊ドリーの誕生、人の胚からES細胞（万能細胞）を取り出し培養する技術の開発、人ゲノムの分子配列の読みとりの終了など、新しい生命科学と医療技術の発展を可能にさせ、人間の生活のあり方を大きく変えるかもしれない重大な革新がなすとげられた。

だが、そのことを喜んでばかりはいられない。これらの発展は、これまで治らなかった病気や障害を治るようにしてくれるかもしれないが、他方、人間が人間であることの変えてしまうかもしれないからだ。すでに1970年代の末に、体外受精が可能になったことから、生殖技術の飛躍的な革新が起こったが、そこでも何をどこまで認めるのかについて多くの難しい問題が生じており、未だに論争がたえない。精子や卵子の提供や売買、借り腹・代理母、ひいては受精卵の段階で産むかどうかを判断する着床前診断などをめぐる生命倫理問題である。

1990年代以降に日程の上ってきたクローン技術、ES細胞の研究利用、遺伝子診断・治療などは、それらに輪をかけて一段と難しい生命倫理問題を数々生じさせている。たとえば、クローン技術を用いてクローン胚をつくり、そこからES細胞を取り出したり、遺伝子診断・治療の研究を進めていけば、多くの病気が治るかもしれない。そこから当人の遺伝子をもった臓器を創り出したり、障害者が生まれないように、また親の希望にかなった子どもが生まれるように、さまざまな操作を加えることができるかもしれない。

こうした重大な生命倫理問題について、従来、生命の尊厳を掲げて慎重論を唱えてきたのは、カトリック教会など、いくつかの宗教教団の勢力だった。だが、特定宗教の教義に基づく慎重論は、その教義を信ずるメンバーではない人たちに対しては十分な説得力をもたない。現在、求められているのは、特定の宗教に基づくのではない論拠に基づく慎重論の構築だろう。だが、それは合理的な論拠に基づくとともに、「いのち」や「死生」（生死）についてのスピリチュアルな要素を含んだ感じ方、考え方に基づくものとならざるをえないだろう。環境問題において、スピリチュアルな次元を含んだディープ・エコロジーの観点が形成されてきたように、生命倫理の分野でも、スピリチュアリティを視野に入れた議論が必要とされる段階に至っているのではなかろうか。

このワークショップは、生命科学者であると同時に哲学や神学に造詣が深く、二つの領域にまたがるような研究を進めてきたウィリアム・ハールバット教授の問題提起を踏まえながら、生命科学や医療に取り組む研究者・臨床家と、宗教やスピリチュアリティについて考え、教えてきた研究者・実践者が、以上のような最新の論題に取り組み、展望を示す機会としたい。

日時 : 2003年10月29日(水) 16:00 ~ 19:00

会場 : 神田学士会館 本館 202号室

基調講演 : ウィリアム・ハールバット(William Hurlbut)

(スタンフォード大学教授、アメリカ大統領生命倫理諮問委員会委員)

コメント : 島園進(東京大学文学部) 加藤眞三(慶応大学医学部)

討論 : 上田紀行(東京工業大学) 樋野興夫(癌研究所) 鎌田東二(京都造形芸術大学)

言語 : 英語(講演原稿は日本語訳を準備します) 日本語

司会 : 町田宗鳳(東京外国語大学)

共同主催 : 東京大学21世紀COEプログラム「死生学の構築」、東京外国語大学総合文化研究所

テキストのなかの死と生

佐藤 健二 (社会学・文化資源学)

世界は「一冊の大きな書物」である、という。この観念は、はたしていつの頃から人々の想像力に導き入れられたのか。日本の地獄には「閻魔帳」があって、積み上げてきた善行や悪行の一切が書かれている、と聞いたのはとても幼い頃だったが、この訓話もいつまでさかのぼれるのだろうか。歴史によって作りあげられた人間の想像力のかたちに興味をもつ社会学者の一人として、個人の秘かな行いを含めて、あらゆることが記載してある記録メディアのイメージの存立は、たいへん興味深い主題である。もしかすると社会という想像の共同体が、現実には人々の身体に力を及ぼす規範的かつ事実的存在である所以にまでかかわる、重要な機制の一つかもしれないと思うからだ。もちろん「帳」や「書物」のイメージが出てくるのは、文字の発明以降の特定の時代であろうが、なお多くの人々がこの想像を受容するためには、印刷技術の社会的普及という条件も関係がありそうだ。さらに掘り下げれば他界観念の成立の問題にもかかわってこようし、官僚制の問題、すなわち戸籍とか教区記録のような、権力によって書かれたものの存在も大きく作用しているのではないかと社会学からは考えてみたくなる。キリスト教の「最後の審判」において、人々の行いを記録したもののイメージがどのような形で介在するのか、イスラム世界ではどうなのか、アフリカのいわゆる「無文字社会」に同じような記録・記憶の観念があるのかどうか。宗教史や人類学の研究者に教えてもらいたい。

「書物としての世界」「テキストとしての社会」は、ただただ観念や理念の問題ではない。ふりかえてみると、われわれが生きる近代の社会生活はあらゆる側面において「文」すなわち「テキスト」として抽象することができるような、すでに書きこまれた言語的・意味的な規定の網の目のもとに置かれている。「死」もまたしかり。近代社会において、あらゆる個人の死は社会的に織り上げられた記録のなかの「現在」性の記載を、一つ一つ解除し、無効の印をつけ、「過去」の領域へと編入していく作業を伴う。まさしくその意味において、人間の死は生物としての、単純にして厳粛なる死体の物質性にとどまることができない。社会がそこにあるかぎりにおいて、死はなによりも記録において共同に承認され、共有された死でなければならないからだ。そこに、テキストの物質性ともいべきものが加わる。近代社会における死は、医師など権威づけられた専門家による認定を必要とし、その証明書をそえた埋葬許可の行政への申請という書かれたものの媒介を必要とする。そうでない埋葬は、死体遺棄であり、時に裁かれるべき殺人とさえ意味づけられてしまう。受け付けた行政の窓口（現住地であることが多い）は、その専門家たちの証明書と関係者からの申請書を根拠に、許可を出すとともに、戸籍を管理している本籍地の自治体に通知する書類を作成し、また住民として行っている多くの関連サービスを停止する作業へとつなげていく。そして通知を受けた本籍地の窓口では、死をすでにある記録システムに書き込んでいく。すなわち戸籍に「亡」を記載する一方で、人口動態統計のための「小票」を作成し担当する部局に回す、等々。多くの関連書類が生産され、それがまたたとえば「除籍簿」のような形で、あるいは「統計小票」のような形で、少なくとも一定の期間のあいだ（小さな自治体の場合は、ものにもよるが半永久的に）テキスト群として残る。いささか逆説的だが、死はじつに数多くの記録や記憶のテキストを生み出すことで、はじめて死として社会的に確証される。もちろん、こうした記録もまた緩慢に朽ち、散逸し、忘れられていくのかもしれない。それも抗えない事実だが、なお「テキストとしての社会」は多元的な織物なので、電子記録の消去ほどに画一的で相互連関的で暴力的ではない。「知の考古学」の実践を受け止められるていどには、分厚く重ね書きされ、あるいは相互参照の結果として意識的あるいは無意識的に生み出された数多くの複写や複製の断片を含みこんでいるからである。

もちろん行政的な組織文書だけを論ずるのは不十分だろう。メディア文書ともいべき新聞雑

誌による共有も、また個人文書というべき記録のなかにも、また文書・記録を超えた習俗や空間のなかにも「死」は刻みこまれる。その意味において、なるほど「死」は簡単には見渡すことができないほど、分厚いテキストである。とするならば「生」という契機は、この分厚く錯綜するテキストの世界の、いったいどこに位置づけられるのだろうか。

たぶん「読む」という実践が生まれる場所に、読者という主体の位相に、割り当てられるのではない。社会と身体とに刻み込まれたテキストを読む行為それ自体こそが、「生」の営みの位置をしめる。しかも読むためには、それをテキストと名づけるだけではなく、まさしくテキストとして集め編纂する作業が必要である。文学部という名のもとに集まった多くの学問、すなわち哲学も歴史学も文学も心理学も社会学も、まさにその意味において生の営みである位相を共有している。とりわけ初期社会科学の実証的な視角が、人間の死を漏らさずに記録した社会的なアーカイブスの二次分析から立ち上がったことを思い出す。グラントの『死亡表』の研究しかり、デュルケムの『自殺論』しかり。その死はどのように名づけられたか、その死はどのように分類されたか、その死はどのように意味づけられたか……。蒐集と編集とにおいてテキストに新しい形態を与え、分析と解釈とにおいてテキストに新しい意味を織り込んでいく。まったくもって強引かつ単純な連想なのだけれど、「死生学」という新語の、表裏一体の可能性を、そんな風に空想してみても許されるのではないか。

Hugh Mellor 教授講演研究会「意思決定理論は何を語るのか」 (What does decision theory tell us?)

— / 瀬 正 樹

日時：2003年10月7日午後5時より / 場所：本郷キャンパス山上会館

2003年10月7日に、ケンブリッジ大学ダーウィン・コレッジ Hugh Mellor 教授の講演会が山上会館にて開催される。Mellor 教授は、K.Popper, Braithwaite らの影響のもとで哲学研究を開始し、時間論、確率論、意思決定理論、因果論などの分野で傑出した仕事をしてきた。著書“Real Time” (Cambridge UP, 1981)ではいわゆる無時制的な時間理論を展開し、著書“The Matter of Chance” (Cambridge UP, 1971)では Popper 流の「確率の傾向性解釈」に基づく確率論を提示した。また、Mellor 教授は Frank Ramsey の論文集の編者としても有名である。今回は、意思決定理論についての講演が行われる。意思決定理論とは、不確実な状況下であるにもかかわらず決断しなければならないときに、果たしてどのように意思決定していくのが合理的か、ということを論じる分野である。講演では原理的な問題が論じられるが、こうした議論が、その応用として、安楽死法の制定、死刑制度の存廃、といった死生学のテーマに深く関わりゆくことは明白である。なぜなら、そうしたテーマが立ち上がる場面では、私たちはその将来的帰結についての確実な判断ができないにもかかわらず、いま緊急的に何らかの決定をしなければならない、という状況におかれるからである。死生学研究を学問的にさらに深めるためにも、意思決定理論について論じることは不可欠である。講演後の懇親会も含めて、多くの方の出席を望みたい。

以下、講演概要を翻訳して掲載する。

「多くの行為は目的のための手段としてなされる。たとえば、喫煙者がガンにかかるのを避けるため禁煙をしようと思決定するように。意思決定理論は、そうした意思決定が、目的の望ましさ（ガンにかかるのを回避すること）と、その手段（禁煙すること）を採用することで目的達成の確率をどれだけ高められるかという、二つのことにどのように依存しているかを語ると主張する。これらの理論は「主観的」であると普通は受け取られている。すなわち、行為者にとっての目的の望ましさは、その行為者がどれほど強くその目的事象を望んでいるかということと同一

だし、その確率は、その行為者がどれほど強くその目的事象が生じると信じているかということと同一だとされる。また、それらの理論は「規範的」であるとも受け取られている。つまり、それらの理論は、必ずしも、行為者が何を行う「だろう」かについて述べているのではなく、もし行為者が合理的に行為するならば何を行う「べき」かについて述べている、とされる。けれども、こうした意思決定理論の読み方は誤っていると思われる。ここで私は、意思決定理論に関するこうした理解の代わりに、二つの異なった、しかし補足的な、読み方を論じたい。一つは、意思決定理論とは主観的だが「記述的」であり、正しいにせよ間違っているにせよ、私たちは信念と欲求によってどのように行為する「だろう」かを語っているのだ、とする読み方である。もう一つは、意思決定理論とは規範的だが「客観的」であると捉える読み方である。すなわち、意思決定理論とは、正しいにせよ間違っているにせよ、目的による手段採用の正当化が、目的の客観的価値、および手段採用が目的達成の客観的チャンスを高める度合い、その二つにどのように依存しているか、そうしたことを語っているのだ、とする読み方である。」

鈴木岩弓教授講演研究会

「『あの世』からの眼差し 遺影を飾る死生観」

島 園 進・鈴木 岩 弓（東北大学教授）

日本を中心にアジア諸地域を視野に収めつつ、民俗意識・生活意識のレベルでの死生観の変容について調査研究を重ねてきた東北大学の鈴木岩弓教授をお招きし、以下の予定で講演研究会を行います。死についての現代人の意識を考える上で、見落とされがちだがたいへん重要な「遺影」が主要なトピックです。（島園進）

日時：10月10日（金）16:50～18:50

場所：東京大学本郷キャンパス法文2号館319教室

話題：「あの世」からの眼差し 遺影を飾る死生観

概要

近年のわが国の年間死亡者総数は、約97万人にのぼる。12,600万人の総人口からするなら、毎年130人に一人の死者が生まれている計算になる。時折、通夜や葬儀の案内板が町内の道路に示されていることを思い返すなら、印象論的な言い方ではあるが、この数字の妥当性に改めて気づかせられることとなる。死というのは、現代日本に住むわれわれにとっても、これほどまでに身近な存在なのである。

とはいえ人が体験する死は、あくまで他者の死である。他者の死を通して、人は自己の死を想い、また死後の世界を考えていく。そこで問題となる「死後どうなるか」ということは、古くて新しい重大な問題である。しかしその正解は誰も知らない。そもそも死というものが不可逆的な現象だからである。わからないがゆえに人は、その答えをさまざまに模索してきた。死んでしまったらそれで終わりさ、という考え方ももちろん見られる。しかし、肉体が滅んでも、霊魂は引き続き存続するという霊肉二分論的考え方は、歴史を超え、地域を越えて広く見られる死後観念として知られている。新聞社などの実施してきた社会調査の結果からは、わが国で死後の霊魂の存在をはっきりと否定するのは20～40%で、多い時には60%の人々が死後の霊魂の存在を認めていることが明らかになる。

ならば、そのような死後の霊魂とこの世に残された生者とはいかなる場において関係を取り結ぶことになるのであろうか。本発表においては、そのような装置の一つとしての「遺影」に着目し、現代日本における実態を見る中から、その死生観を考えることとしたい。（鈴木岩弓）

Animacy 研究会趣意書と研究会報告

林 徹

世界のさまざまな言語において、有生の対象（人間、動物）を表す名詞と無生物を表す名詞の振る舞いが異なる場合がある。あるいはそのような振る舞いの違いは、人間を表す名詞とそれ以外という区別に基づいていることもあれば、更に異なった種類の区別に基づくものであることもある。このような現象の背景には [人間 > 人間以外の生物 > 無生物] という序列が潜んでいることが推定され、言語学ではこの意味的な特徴を有生性（Animacy）と呼んでいる。

この、人間とモノを両極にした、生命を持つものから持たないものまでの序列が何を表しているのかといえ、それは人間の人間観・生命観にほかならない。人間が生命を持つものと持たないものをどのように区別して認識しているのか、ほかならぬその区別が人間の言語の構造のなかに一定の形式をもって浮かび上がってくるのである。

これまでの研究で、例えば同じく「人間」であっても1・2人称が3人称よりも序列において高い位置を占めることが指摘されるなど、有生性はさらに人称や名詞の文法的な性質を含んだ発展的な概念に拡張されている。しかしながら、有生性をテーマに据えた研究は未だ少なく散発的で、今後の発展が大きく期待される分野でもある。

本研究会は、この有生性が世界の諸言語の文法構造にどのように反映されているのか、そしてそこには果たしてどのような普遍的な原理が働いているのかを追求することをその目的とする。



このような趣旨のもと、我々はさる6月11日に第一回Animacy研究会（於山上会館）を開催した。吉田浩美氏による「バスク語（アスペイティア方言）に見られるAnimacyが関係する現象」と題する研究発表があり、続いて十余名の参加者との間で質疑応答が行われた。

研究発表において議論されたのは、次の二点である。バスク語アスペイティア方言において、(1) 名詞・形容詞の格のパラダイムが、有生であるか無生であるかによって一部異なること、(2) 「XのYが～する」を表す構造に有生性が関係すること。

今後は1、2ヶ月に一度づつの頻度で公開研究会を開いていくことを計画している。さまざまな言語の研究者が集い、有生性という一つのテーマに焦点を当てて議論を重ねることによって得られるべき大きな進展が期待される。

Levine 教授講演研究会の報告

市川 裕

講師：ヒレル・レヴィン教授（ボストン大学）

テーマ：プラトンから「生きる」（黒澤明）まで 行き詰まり社会における問いかける生と意義ある死について （初期近代ユダヤ教における死の儀礼化を手がかりに）

From Plato to Ikiru: On the Examined Life and the Meaningful Death in the 'Stuck Society' with a Footnote from the Ritualization of Death in Early Modern Judaism



発表要旨

社会が行き詰まったとき、それを突破するのはいかにして可能か、という大きな問いに対して、レヴィン氏は、人間のもつ二つの特徴、死を予期しうることと記憶をもつことに着目して、近代初期ユダヤ教における死の儀礼化を、その突破の一例として提示しつつ、今日の閉塞した日本社会の突破口についての示唆を与えた。

近世初期は一般的傾向として世俗化が進行し儀礼は後退したといわれるが、実際にはユダヤ人社会では、死の儀礼化が突然に起こった、それはなぜだったか。レヴィン氏は、これをユダヤ人社会の閉塞状態の突破として意味付ける。即ち、16世紀にヴェネチアに出現したゲットーは、ヨーロッパ世界に浸透しユダヤ人の差別化は目に見えて顕著になる中で、1666年のシャブタイ・ツ

ヴィのメシア運動は偽メシアか否かで社会を大混乱させ、ユダヤ人社会が閉塞状態に陥った。そのとき、死に対する関心が薄かったユダヤ人社会は、死の儀礼化を通して生に新たな意味付けを与えることを可能にしたという。

具体的には、16世紀の印刷術の発展に際して、最初に印刷されたものが、法文献でなく神秘主義文献であり、それはイツハク・ルーリアのカバラであったこと。ヘブラー・カッディシャー（神聖組合）が葬儀を体系的に扱う団体として設立されたこと。ユダヤ人富豪が葬儀用具の芸術品の作製に出資したこと。葬儀は家庭の私事でなく公共的性格をもつことの意味付けを行うこと。善行としての死者供養が救済を左右するという意味付けが与えられて、葬儀に神秘主義的意味付けが為されたこと、等が指摘された。



コメント

出席者約50名で、学生・院生から学外の教員、専門的知識人までの幅広い参加者で、近世のユダヤ人社会の死の儀礼化という聞く機会ほとんどない主題が扱われたので、新たな興味を喚起すると共に、他の文化における同種の主題との比較への興味も募った。

ワークショップ「仏教における死生観」の報告

末木 文美士



仏教は、もともと生・老・病・死の苦という問題から出発しており、生と死についてもっとも深く考えてきた宗教である。仏教とは生死の苦から解脱することを目的とする宗教といえる。しかし、広い地域と長い時代にわたって展開してきているだけに、その中にはさまざまな思想が展開し、必ずしも単純な原則論で一貫しているわけではない。

また、思想面の展開だけでなく、仏教はしばしば葬送儀礼に関与することによって、民衆の支持を得てきた。葬式仏教という日本の仏教の形態はそのもっとも典型とするところである。仏教を抽象化された思想としてだけでなく、現実に行なわれる儀礼と関連させて理解しようという傾向は、近年の仏教研究の主流となりつつある。

このような動向を受けて、本ワークショップでは、東アジアの仏教を中心に、思想・儀礼の両方にわたり、死の問題をどう捉えてきたかという問題を討議した。

主要な発表者であるジャクリン・ストーン氏は、日本中世の場合を中心に、死後が非常に大きな問題と考えられた時代に、仏教がその救いに大きな役割を果たしたこと、臨終のあり方が死後を予知するものとして重視されたことなどを論じた。こうして現代と相違する中世の発想を明らかにするとともに、それにもかかわらず時代を超えて一貫する問題があることを指摘した。

これに対して、主として中国仏教を専門とするダニエル・スティーヴンソン氏、ポール・スワンソン氏、リンダ・ペンカワー氏、主として日本仏教を専門とするジャン・ノエル・ロベール氏、ポール・グローナー氏、ルチア・ドルチェ氏から、多方面からのコメントが寄せられた。

さらに会場からも活発な意見が出されて討論された。その中で明らかにされたのは、死をめぐる仏教の思想が必ずしも論理的に整理されたものではなく、例えば、死後の状態がもう定まっているのに、追善が行なわれるような矛盾があり、そこに死の問題の難しさがあるということである。



今後の予定

シンポジウム 「死生観と心理学」

2003年9月14日(日) 10:00~12:00

東京大学・経済学研究科 第1教室

Hugh Mellor 教授講演会「意思決定理論は何を語るのか」

2003年10月7日(火) 17:00~18:30

東京大学・山上会館

鈴木岩弓教授講演研究会

『『あの世』からの眼差し 遺影を飾る死生観』

2003年10月10日(金) 16:50~18:50

東京大学文学部 319 教室

Willam Hurlbut 氏による いのち の研究会・ワークショップ

「生命科学とスピリチュアリティ 生命倫理への新しいアプローチ」

2003年10月29日(金) 16:00~19:00

東京大学・学生会館本館(神田)

シンポジウム 「死者と生者の共同性」

2003年11月28日(金)、29日(土)

東京大学文学部 1番大教室

第1部：現代哲学はどう死を主題化してきたか(講演)

第2部：諸文明における死者と生者(シンポジウム)

第3部：死者と生者の現在(シンポジウム)

詳しくは、ホームページ(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>)でご確認下さい。

事業推進担当者

(拠点リーダー)

島園 進 <宗教学>

(第一部会：死生学の実践哲学的再検討)

竹内 整一 <倫理学・世話人>

熊野 純彦 <倫理学・世話人>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

一ノ瀬 正樹 <哲学>

榊原 哲也 <哲学>

(第二部会：生と死の形象と死生観)

小佐野 重利 <美術史・世話人>

木下 直之 <文化資源学>

後藤 直 <考古学>

(第三部会：死生観をめぐる文明と価値観)

下田 正弘 <インド哲学・世話人>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

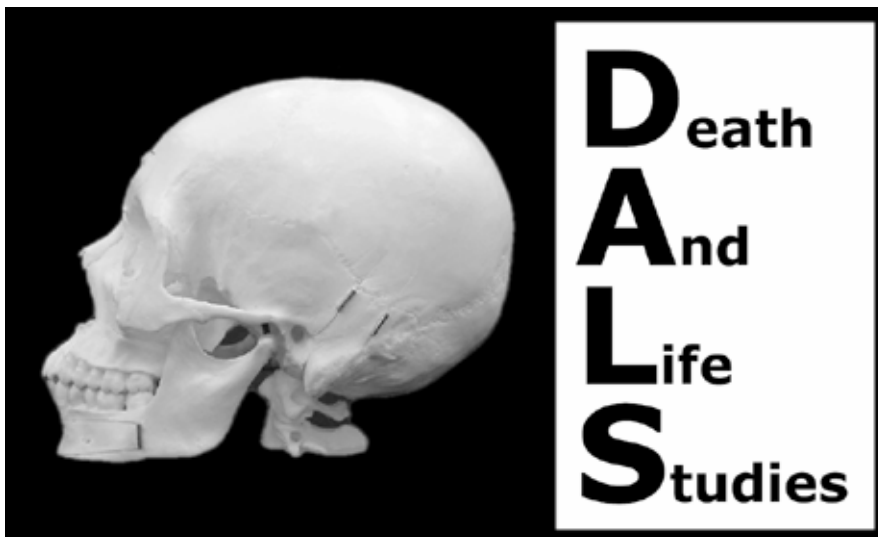
(第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討)

横澤 一彦 <心理学・世話人>

立花 政夫 <心理学>

林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>



「DALIS ニュースレター」

第3号

平成15年9月1日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

21世紀COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島蘭 進

TEL & FAX 03-5841-3736